

第1回 進物帳を読む

倉敷市歴史資料整備室 山下 洋

▼井上家について

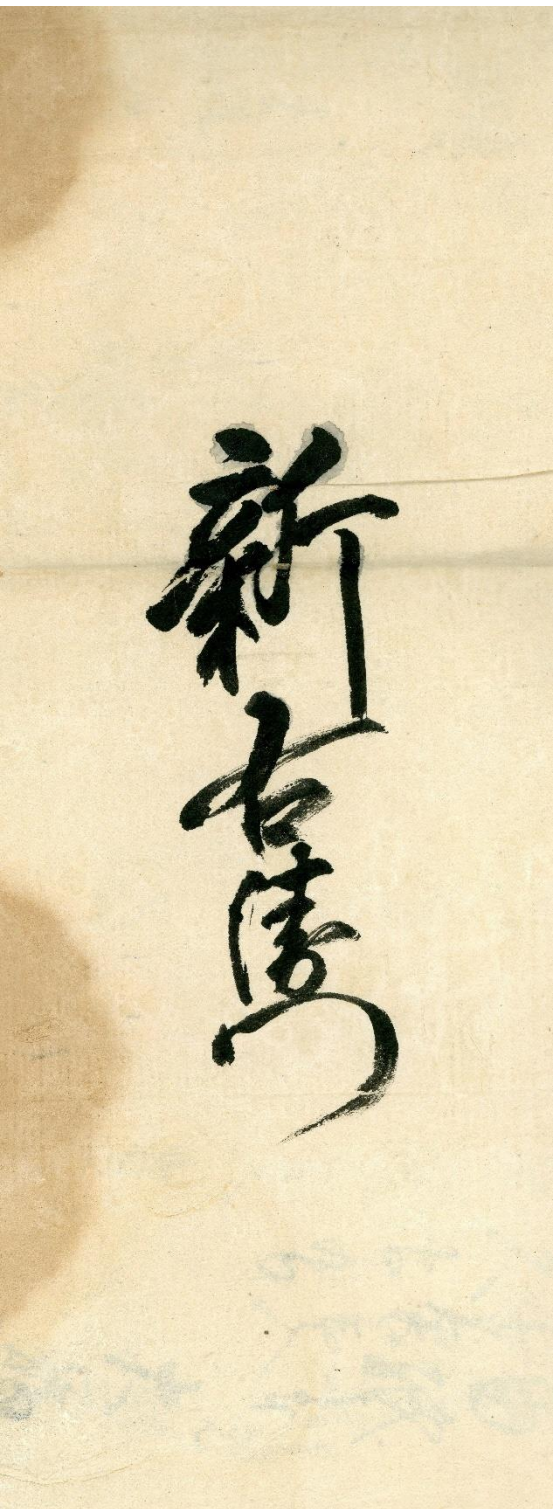
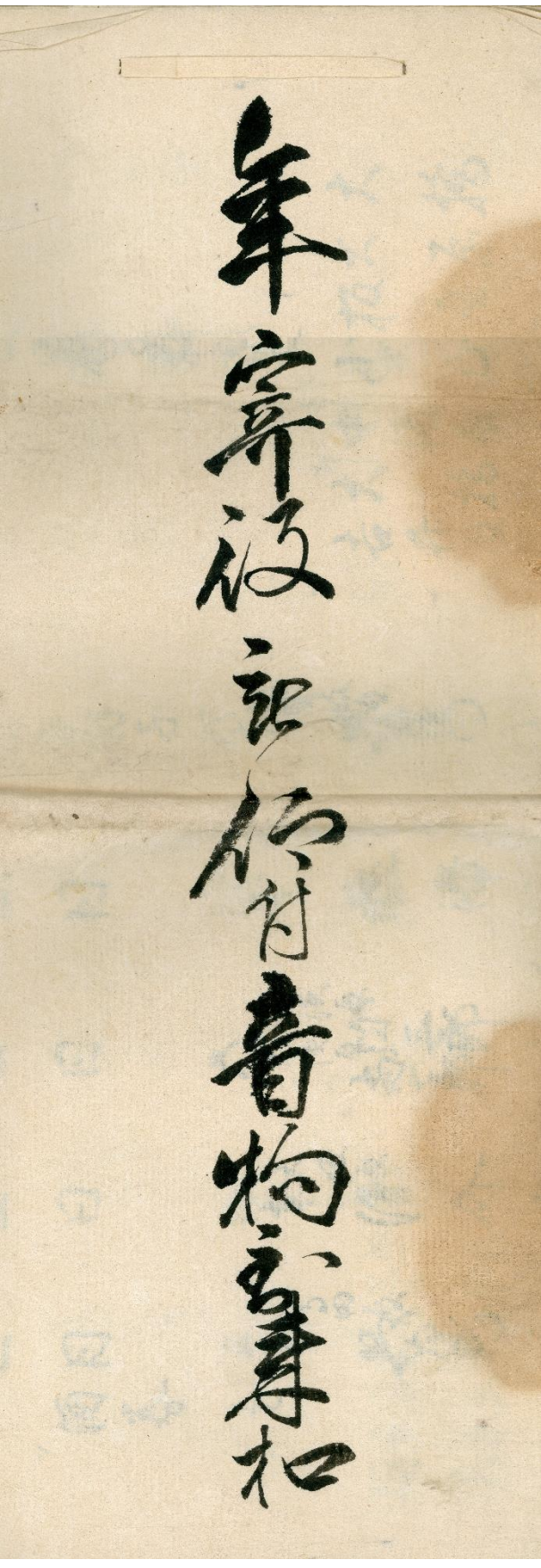
室町時代の応永年間（1394～1428）、高畠清貞が阿波国（徳島県）から備前児島へ渡り、高畠城（玉野市）に在城。やがて天正年間（1573～1591）ごろ、高畠和泉守が小串城（岡山市）に在城。和泉守の息子・市正（市之丞あるいは右近）貞政が宮崎村（現・早島町）に移り住んで新田開発に従事。市正の次男・新右衛門が、おそくとも16世紀末ごろまでに倉敷村に移り住む。井上姓を名乗る。屋号の宮崎屋は宮崎村にちなむ。分家の屋号は花屋。

江戸時代、倉敷村で村役人や酒造株などを独占してきた古禄十三家のうちの一軒で、3代・三郎右衛門から明治初年の新右衛門（亮三）まで断続的に年寄役を勤めた。江戸時代後期に起こった新禄古禄騒動で多くの古禄が没落するなか、井上家は家産を維持した。家業は、金融業・地主経営・酒造業・薬種の商いなどを行っていた。歴代当主からは文芸や絵画など文化面に秀でた人物を輩出し、僧侶や神職になった当主もあった。現存する主屋（国指定重要文化財）は、享保6年（1721）ごろの建築で、美観地区内の町家のなかで最も古い。

▼進物（＝音物）

誕生・初節句・紐落し・元服・婚礼・出産・還暦・喜寿・臨終などの通過儀礼、中元や歳暮、病気や災害、新築、旅立ち、あるいは就役や褒賞などにあたり、贈られたり贈ったりした金品が帳面に書き留められている。個人宅の古文書にしばしば含まれていて、そうした贈答は社会関係を取り結ぶうえで、とても大切であったことが分かる。どのような場合にどのような品物が贈答されていたかも知ることができる。

【資料1】 井上家文書 9―4―3



一府子抄

仁利無改
平易作古
重之增厚
古七病

一府子
印本
志書

一曰
三本
德藏

一曰
三本
神曉

一曰
三本
水澤

一松魚
三本

一 伴海老 浅反
生貝卦

一 扇子卦 振 謹 正

一 酒 養 姝 既

一 扇子卦 兄 姝 既
竹 子 卦

一 拔 子 入 姝 親 龍 子
酒 養 姝 既

一 扇子卦 大 姝 既 合

一 大鯰

まふ

りあ

中江郎
要
柏
十
吉

一 扇

子

漢田

治

一 鱈

まふ

大

計

一 小鯛

まふ

吉

吉

一 中鯛

まふ

小

一 中

以

新

子

一 厨子 平本 恒田
中 鯛 喜友
大 こま

一 鯛 喜友 尾崎

一 小 鯛 喜友 貴花
文野
さ 是 三つ

一 大 鯛 喜友 祢 臣

一 大 鯛 喜友 仁 臣
揚康

一 生 果 喜友 本 寺
又 陽

一 生 果 喜友 本 寺
又 陽